

異文化理解との出会いと導きの糸

高城 玲

1. 身近にもある異文化＝他者理解

「異文化理解」と言うと、何か肩肘を張った大きな問題のように感じるかも知れない。まず、頭に浮かぶのは、外国語をマスターした上で、海外に赴き、外国人とその文化を理解しようとする事だという印象ではないだろうか。「異文化理解」とは、そのような何か大げさな、私たちの日常とはかけ離れたことと認識されている一面があるだろう。

もちろん、グローバル化時代が叫ばれて既に十年以上が経過している昨今、外国語を身につけた上で、海外で異文化にどっぷりと浸かりながらその異文化を理解するという営為の重要性は、さらに一層強まっていると言える。ただ、ここであえて強調したいのは、「異文化理解」が海外での経験に限定されるのではなく、また私たちの日常生活と疎遠なことばかりではない、という点である。別の言葉で言い換えれば、異文化との出会いは日常の身近な至るところにも溢れかえっているということである。

例えば、大学内の授業やサークルで留学生と日常的に触れ合う機会も少なくないだろう。また、学外でも偶然入った店の店員が中国人だったなどという経験は今や日常茶飯事である。そうした日常的な身近な場所に異文化との出会いはいくらかでも転がっているのだ。

逆に言えば、海外に出かけていったから、あるいは、海外に住んでいるからと言って、必ずしもその異文化と積極的に触れ合い、現地の人々を理解しようとしているとは限らない。例えば、私がタイで長期のフィールドワークをしていた十数年前に、首都のバンコクで見知った日本人の例を挙げてみよう。

バンコクには、世界の首都でも最大規模の在留邦人が居住している。そこでは、スクムヴィット通りをはじめとして日本人同士がかたままって、同じコンドミニアムに集住しているケースが多く見られる。近くには、日本の食材を揃えたスーパーマーケットの他、日本料理店、日本語の書店はもとより、レンタルビデオ店、クリーニング店、クリニック、歯科医院など、ありとあらゆる日本人向けのサービスが整えられている。企業の駐在員として会社で働いている会社員は、職場で現地タイの社員やクライアントと接する機会もそれなりに多くあるだろう。

しかしながら、そうした駐在員の家族としてタイに居住している人々は、身近に日本のサービスが溢れている環境の中で、特に現地タイの人々と関わりを持たなくても、日本と同じような、あるいは日本以上に便利な日常生活を送ることができるのである。中には異国のバンコクで、日本食のみを食べ、日本のテレビを衛星放送で見、日本語の新聞と雑誌を購読し、会話をするのも家族か近隣の日本人のみという極端な人も見受けられる。つまり、このような人は、確かにタイという海外の異文化社会に居住してはいるが、全て日本流で貫いているのである。そこには現地の異文化を理解しようとする意識や意志が完全に欠落していると言えるだろう。

逆に、日本国内に居ながらにしても、意識さえしていれば、異文化との出会いはいくらでも見いだすことができる。日本国内で海外の人々や文化と触れ合うということだけではなく、より広く「異文化」を「他者」と置き換えて考えてみれば、本当に日常のいたるところに異文化＝他者理解の機会が埋もれていると言えるだろう。

東北出身の人にとって、神奈川大学で出会った九州出身の同級生は、ある種の異文化＝他者として眼に映るだろうし、70歳代の高齢者にとって、渋谷の街を闊歩している若者も、まさに異文化＝他者と呼ぶにふさわしい存在だろう。より身近な友人や夫婦、恋人関係の相手さえも、自分とは異なる習慣や考え方によって、時に異文化＝他者として感じられる瞬間もあるのではないだろうか。つまり、こうした広い意味での異文化＝他者との出会いは、身近な日常にあふれており、そうした異文化＝他者を理解するということは、私たちが生きていく上で必要不可欠な重要な行為だと言えるのである。

では、異文化＝他者理解とは具体的にどのようなものなのだろうか。以下本稿の2では、まず差異という言葉のひとつのキーワードに異文化理解について考える。続く3では、本来私たちに備わっている好奇心、知的関心から異文化理解の楽しさを示すと同時に、他方で、異文化理解が抱える困難さについても考えてみたい。次の4では、私自身のタイでのフィールドワーク経験を事例として取りあげる。事例では、「異文化＝他者」と「自文化＝自己」との差異に出会ったことで、腑に落ちて異文化＝他者を理解し得たと感じたひとつの瞬間、個人的経験を紹介する。そのことによって、異文化＝他者理解の具体的な可能性を考えるきっかけとしてもらえれば幸いである。

なお、最後の5では、異文化理解への導きの糸として、関連する文献をいくつか挙げておく。今後、各自が異文化理解への認識を発展させていく際の参考にしてもらいたい。

2. 差異を認める異文化理解

まずは、異文化＝他者理解のとらえ方について考えてみよう。上述したような広い意味での異文化＝他者理解というものを、どのように捉えていけば良いのだろうか。ここでは、NHKの座談会で語られた鷺田清一氏の言葉を考えるきっかけとして紹介したい。

鷺田氏は、前大阪大学の総長で、本来は現象学や身体論を専門とする哲学者である。ファッション

ンから古いなど、幅広いテーマを一般の人々にも分かりやすく伝え、社会の現場との関わりを重視する臨床哲学を実践している人でもある。「異文化理解を深めるには」という2008年放映の対談の中で、鷺田氏は次のように述べている。

「他者のことを理解するという事は、普通考えられているように、その人と考えが同じになるとか、同じ気持ちになるとか、つまり、何かを共有するという事では必ずしもないのではないのでしょうか。他者と自分の間に何か共通項を発見するということが、一般に他者の理解のように言われていますが、私は実は反対なのではないかと思うのです。つまり、本当に深くつきあえばつきあう程、交われば交わる程、お互いの間の差異が細部にわたって際立ってくる、そうした経験のほうが多いのではないのでしょうか。同じものを見ているのに、あるいは同じ場所に居るのに、あの人はこのように感じるのかと驚く場合があるように、ますます自分と他者との差異が繊細なまでに際立ってくる、そうした場合の方が実は多いと思うのです。そして、そのことを無理に理解しようとしなくて、違うという事実をそのまま受け入れる、これが、本当の意味での他者理解ではないかと思うのです」。

この対談の言葉は非常に含蓄に富んでいる。異文化理解を他者理解として置き換えた上で、他者理解とは他者と同質化、均質化していく過程ではなく、むしろ他者との差異を見出し、そうした差異を抱えた者同士が同じ地平に生きているという事実を直視すべきだと指摘しているのである。そこには、異文化＝他者理解ということが、仲良しクラブ的な生易しいものではなく、差異を抱えた他者をそのまま認め合うというある種の覚悟を必要とするものであることが示されている。

差異を抱えた他者同士は、時にはその差異によって、ぶつかり合い、衝突することもあるかもしれない。他者の差異をそのまま認め合うという他者理解は、そうした自らの身を削る覚悟で他者と対峙することでもある。ますますグローバル化していく現代に生きる私たちに求められているのは、そうした差異を含み込んだ他者理解への覚悟なのだと、鷺田氏は警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

3. 異文化理解の楽しさと困難さ

次に、差異を抱えた他者理解が本来持っている楽しさと、他方でそれがいかに困難であるかということについて考えてみたい。

本来、私たち人間は異なるものに対面した時、一方で慎重に警戒しながらも、他方では多かれ少なかれ何らかの好奇心を抱くことが多いだろう。自分自身の経験としても、普段見慣れている当たり前の世界とはかけ離れた世界に出会うと、まずこれは一体何だろうと好奇の視線で対象に関心を抱く場合が多い。その見慣れない対象は、人である場合もあれば、モノである場合も、時には言葉や慣習などであることもある。時には、あまりにもなじみのない人やモノなどに対して、珍しさ故に目が釘付けになってしまうような経験をしたこともあるのではないだろうか。それはつまり、対

象への好奇心や関心が強すぎて、何とかしてその対象を知りたいという欲求を抑えがたいことの証でもある。

そうした異なる対象に対する知的な好奇心や欲求は、誰にでも備わっているものである。そして、見慣れない、聞き慣れない異なる対象を、異なるものとして少しずつでも理解して行く過程は、これも本来楽しいことではないだろうか。目が釘付けになるような対象と直に接する時間をもったり、自分なりにその対象を調べたりする過程は、それまで全く理解不能だった対象全体の見取り図が次第に浮かび上がってくるようなワクワクする経験でもある。

それは、夜の漆黒の闇に埋もれていて、何かは分からないが、何か自分とは異なるものがそこには居るという気配に引きつけられた時の感覚にも似ている。当初は闇の中に気配だけが感じられて、分からないだけに、その対象を知りたいという好奇心が募っていく。それが、朝靄の中におぼろげながら次第に姿形を顕わにしていく過程は、まさにドキドキと心躍る楽しい過程となるだろう。

なじみの薄い異文化＝他者と出会った時も、これと似たような過程を辿る。当初、何であるか分からないだけに、好奇心を募らせ、それを何とか理解したいと願う。そして時間を経るにつれて、そうした異文化＝他者が、異なるものではあるけれども、次第におぼろげながら理解可能な姿形をとってくる。こうした異文化＝他者理解の過程は、本来、まさにワクワクするような心躍る楽しい経験なのである。

しかしながら他方で、異なる異文化＝他者を理解する心躍る楽しい過程には、ともすれば易きに付いて陥りがちな罠も隠されているように思う。それは一面で異文化＝他者理解の困難さとなる。

異文化理解の陥りがちな罠、困難さとは、簡単に言えば、一般に流布しているレッテル貼りで分かったつもりになってしまうことである。私たちは、何らかの対象を認識するとき、ごくシンプルな言葉や表象でもって、その対象をカテゴリー分けし、理解しやすいなじみの認知枠組みで捉えようとする。特に自文化との違いを強調して、異文化に対する安易なレッテル貼りをを行うことが多い。

例えば、私のフィールドであるタイに関して例を挙げてみよう。具体的にタイという国を知らない人でも、メディアで紹介されるタイに関するキャッチフレーズ的な表現はどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。「微笑みの国」、「仏教の国」、「国王のいる国」、「ムエタイの国」、そして最近では「政治的なデモが多い国」など、主にメディアで取りあげられる頻度によって、タイという国のレッテル貼りだけが一人歩きして世間に流布されていく。

このいずれのタイに関する表象も間違いではなく、事実としては一面で正しい。しかしながら問題は、これらのレッテル貼りがシンプルであるからこそ、過大に大きな力をもってしまい、こうした表象のみで、異文化＝他者を理解したつもりになってしまうことである。確かに「仏教の国タイ」という指摘は、それなりに正しいのだが、他方で、タイでは仏教が多く信仰されているという指摘だけで理解できるほど単純な宗教構造でもないのである。

そこに潜んでいる異文化理解の罠とは、キャッチフレーズ的なレッテル貼りで分かったつもりになり、そのことがより深い異文化＝他者理解への入り口を塞いでしまうことなのである。分かった

つもりになって、その先にある、タイにおける具体的な宗教実践のあり方などに関するより深い好奇心探求への扉を自ら閉じてしまう危険性が、そこには孕まれている。

異文化＝他者とは、そのような簡単なキャッチフレーズだけで言い尽くせるような底の浅いものではない。鷲田氏の言葉にもあるように、本来、長くつきあえばつきあうほど、異文化＝他者との差異が際立ってきて、ますます好奇心と探求心を駆り立てられるような奥深いものなのである。

正直に告白すれば、私自身も、キャッチフレーズ的なタイを表象する言葉で、分かったつもりになり、異文化理解の安易な罠に陥っていた経験がある。そこで次には、私のフィールドワーク経験で具体的な現地の他者と密接に接する中で、そうした罠に陥っていた自分自身に気づき、初めて腑に落ちて他者を理解し得たと実感した瞬間の事例を紹介してみたい。

4. 経験の中の異文化理解との出会い

タイを紹介する言葉として、先にも挙げた「微笑みの国」というキャッチフレーズがある。メディアや旅行案内、パンフレットなど、周りを少し注意して見渡してみれば、タイを表象する「微笑みの国」という言葉は巷に氾濫している。

確かに、一度ならずタイを観光旅行したことがある人なら、この「微笑みの国」というキャッチフレーズ通りに、タイの人々から至る所で笑顔を向けられた経験があるのではないだろうか。まず、飛行機やホテル、レストランの入り口などでは、ワイという合掌のしぐさと共に膝を折り曲げながら上目遣いにニッコリと微笑む従業員らの姿が思い起こされることだろう。それだけでなく、初めて唐突に道を聞いた相手でも、無愛想に対応されることはまれで、正確な答えが返ってくるかは別にして、取りあえず男女を問わず微笑みながら対応されることが多い。

こうして、「微笑み」というキャッチフレーズは、ホスピタリティに溢れる国というプラスの価値評価を伴って、タイという国を一言で表象する言葉として、一般に流布されていく。このこと自体は取り立てて間違いではない。私自身がタイを調査・研究対象と決めることになったのも、当初、そうした微笑みで迎えられる居心地の良さに惹かれた故という面も多分にある。しかしながら、「微笑みの国」という単純な言葉で言い尽くされるが故に、その概念を私自身が馴染んできた日本的な感覚のみで捉え、タイを理解したつもりになっていた点も否定できない。こうした一方的な視点による誤解を伴いながら、タイの一面を分かったつもりになって、「微笑み」の背後にあるタイ的な要素をより深く探求しようともしていなかったのである。まさに安易に流れて異文化理解の罠に陥っていたとも言えるだろう。

「微笑み」の背後にあるタイ独特の要素に気づくには、まず、タイ語の大辞典を意識して紐解いてみれば良い。当初は、漫然と辞書を見ていて気がつかなかったが、タイ語の「微笑み(yim)」という言葉には、他の語を伴って、実に多様な、そして繊細なニュアンスを含んだ成句が数多くある。例えば、日本語では単に「晴れやかな微笑み」と表現される言葉に、タイ語では「頬が裂けそ

うなほどの晴れやかな微笑み」、「あでやかで晴れやかな微笑み」、「満足げな晴れやかな微笑み」などいくつもの表現のバリエーションが存在する。他にも「唇を開かずに微笑む」など日本人の概念ではそのニュアンスが想像しにくい微笑みをあらわす言葉も含まれている。つまり、日本的な微笑みの概念でタイの微笑みを分かったつもりになっていたのでは、大きな誤解に繋がりがかねないし、微笑みの背後に広がっているタイという異文化の姿を取り逃してしまいかねないのである。安易にレッテル貼りしていた「微笑み」の背後には、微妙で繊細なタイ的な意味合いが隠されているのである。

この点に気づいたのは、実はタイを調査対象として大学院で研究を始めたずっと後、現地でのある経験がきっかけだった。そこで、日本的な視点のみでは気づき得ない、タイと日本の「微笑み」をめぐる自他の差異を本当に腑に落ちて理解できたと実感した経験を以下では紹介してみたい。そのことを通して、異文化＝他者理解の具体的な可能性を考えるきっかけとしてもらえれば幸いである。

タイ中部の農村地帯で長期2年間のフィールドワークを開始して、1年あまり経った時のことである。当時私は、文化人類学的なフィールドワークを行うべく、稲作農村地帯の農家に寄宿させてもらっていた。同じ場所で寝泊まりし、同じものを食べ、出来る限り同じような活動に直接参与しながら、同時に異文化＝他者を観察して理解しようとしていたのである。

フィールドワークも1年を経た頃、村でガムナンという村長的な存在を選ぶ選挙が行われることになった。地方行政における村の首長を選出する選挙である。二人の候補者が立候補し、約1ヶ月にわたる選挙運動が繰り広げられた。二人の立候補者の内の一人が、私が寄宿していた家の妻エカラートさんの兄ブンさんだった（名前は仮名）。そのため、エカラートさんと夫のアパイさんは、ブンさん陣営の参謀として、選挙運動を取り仕切る立場となった。私が寄宿していた家も実質的な選挙事務所として、運動期間中はまさに昼夜を問わず人が出入りし、怒濤のような1ヶ月の選挙運動となったのである。まさに、選挙戦というように、戦いさながらにほとんど休む暇もなく、多種多様な運動が繰り広げられていた。

当時のタイの地方選挙では、もちろん違法ではあるが、「実弾」が飛び交うことが珍しくない状況だった。「実弾」とは、モノ、金、そして銃弾を指す。選挙民の支持を得るために、まず頻繁に行われるのは、ギン・リアンと呼ばれる饗応、宴会である。そこでは、選挙民を集めて宴会を開き、酒やおかずというモノを提供し、自陣営への投票を呼びかけるのである。時によっては、現金が飛び交う買票、買収も珍しくなかった。そして、まれにではあるが、立候補者や主要な選挙運動員に対する暴力行為が選挙運動にはつきものとも言われるような環境にあった。ひどいときには、本物の「実弾」である銃弾が飛び交うこともある。現に、前回の選挙運動期間中には、当時のガムナンが銃で狙われて、そのために彼は片目が義眼となっていた。

このような選挙運動という環境の中、当時私は一方の陣営の事務所的な場所に寄宿しながら、調査をしていたのである。1ヶ月という運動期間中は、本当に目も回る忙しきで、多くの人が入れ替

わり立ち替わり訪れ、饗応、宴会をいつどこでどのように開催するか、相手陣営の動きはどうなっているかなど、ほとんど眠る間がないような状態が続いた。同時にそれは、運動員たちにとって相手陣営側から暴力行為を受ける可能性も否定できない緊張を強いられる1ヶ月でもあった。

そうした緊張感あふれる怒濤のような1ヶ月を過ごし、投票日当日、すぐにその場で開票が行われた。結果は、相手陣営の僅差での勝利だった。

それまで気づかなかった「微笑み」のタイ的な奥の深さに触れることが出来たのは、その時のことである。投票結果が出た時に、選挙運動を実質的に仕切ってきた、エカラートさんが見せた「微笑み」は今でも私のまぶたにくっきりと焼き付いている。それは、タイ的な「微笑み」の奥深さを全く理解していなかった自分自身の異文化理解の浅さに気づかされた瞬間でもあった。

この時のエカラートさんの微笑みは、一見確かにタイで良く眼にするあの「微笑み」であり、遠くから見る限りは晴れやかな明るい微笑みだった。しかし、彼女が近寄ってきてその顔をよく見てみると、明るい微笑みがたたえられているその瞳には今にもあふれ出しそうな涙が浮かんでいたのである。その涙は、微笑みの表情には一切表れていない、表情としてはあくまで明るい晴れやかな微笑みだった。日本語では、あくまで微笑んでいたとしか表現できないのだが、本当に微妙な得も言われぬ表情は、今でも決して忘れ去ることが出来ない印象深いものだった。

それは、日本的な視点のみでは決して理解できないような異文化＝他者との繊細な差異を思い知った経験でもあった。この時私は、そうした奥深い豊かなタイの微笑みに初めて気づいたと言える。つまり、一般に流布されている「微笑み」とは異なる、タイの微笑みの内奥をわずかでも理解できたような実感を持つことが出来たのである。この「微笑みの眼に涙」という体験は、通り一遍の安易な異文化＝他者理解とは位相を異にする、本当に腑に落ちてタイの微笑みの一端を理解できた貴重な経験だったと言えるだろう。

それまで「微笑み」ということでタイの一面を分かったつもりになっていた底の浅い異文化理解から、長期のフィールドワークを経て、「異文化＝他者」と「自文化＝自己」との差異に出会ったことで、初めて腑に落ちて異文化＝他者を理解し得たと感じたひとつの瞬間、個人的経験となったのである。それは、キャッチフレーズだけの底の浅い異文化理解の罟を思い知った瞬間でもあった。

5. 異文化理解への導きの糸－関連文献の私的案内－

これまで、キャッチフレーズに流されず、実際の経験から他者との差異を実感しながら異文化理解を深めていく重要性を記述してきた。この異文化＝他者と直に接するという経験の重要性はいくら強調しても足りないくらいだろう。

しかしながら他方で、経験のみが異文化理解の全てでもない。そこには、経験を適切な異文化理解へと導いてくれる、これまで積み重ねられてきた多様な視点や研究の存在も忘れ去ることはできない。そこで最後に、異文化理解への導きの糸として、関連する文献をいくつか挙げておきたい。

断っておきたいのは、ここで挙げる文献が異文化理解の一般的なスタンダードではなく、経営学部
の学生向けに考えた私の私的な選択であるということである。この点を承知した上で、以下の私的
文献案内を異文化理解深化への導きの糸として活用してもらいたい。

(1) フィールドワーク

- ① 稲賀繁美編 [2000] 『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会。
- ② 佐藤郁哉 [2002] 『組織と経営について知るための実践フィールドワーク入門』有斐閣。
- ③ 佐藤郁哉 [2006] 『フィールドワーク一書を持って街へ出よう (増訂版)』新曜社。
- ④ 菅原和孝 [2006] 『フィールドワークへの挑戦—〈実践〉人類学入門』世界思想社。
- ⑤ 好井裕明 [2006] 『「あたりまえ」を疑う社会学—質的調査のセンス』光文社新書。

(2) 異文化＝他者理解の成果

- ① 飯田卓・原知章編 [2005] 『電子メディアを飼いならす—異文化を橋渡すフィールド研究の
視座』せりか書房。
- ② 石牟礼道子 [2004] 『新装版 苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫。
- ③ エドワード・サイード [1993] 『オリエンタリズム (上) (下)』今沢紀子訳 平凡社。
- ④ 小笠原祐子 [1998] 『OLたちの「レジスタンス」—サラリーマンとOLのパワーゲーム』中
公新書。
- ⑤ 小田亮 [2000] 『レヴィ＝ストロース入門』ちくま新書。
- ⑥ 春日直樹 [2005] 『なぜカイシャのお偉方は司馬遼太郎が大好きなのか?—カイシャ人類学
のススメ』小学館。
- ⑦ 鎌田慧 [2011] 『新装増補版 自動車絶望工場—ある季節工の日記』講談社文庫。
- ⑧ クリフォード・ギアツ [1987] 『文化の解釈学1』吉田禎吾・中牧弘允他訳 岩波現代選書。
- ⑨ 小馬徹編 [2002] 『カネと人生 (くらしの文化人類学)』雄山閣。
- ⑩ 田中雅一・中谷文美編 [2005] 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社。
- ⑪ 田辺繁治 [2003] 『生き方の人類学—実践とは何か』講談社現代新書。
- ⑫ 中谷文美 [2003] 『「女の仕事」のエスノグラフィー—バリ島の布・儀礼・ジェンダー』世界
思想社。
- ⑬ 速水洋子 [2009] 『差異とつながりの民族誌—北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』
世界思想社。
- ⑭ 平井京之介 [2011] 『村から工場へ—東南アジア女性の近代化経験』NTT出版。
- ⑮ ブロニスワフ・マリノフスキ [2010] 『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳 講談社学術文
庫。
- ⑯ ベネディクト・アンダーソン [2007] 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』
白石隆・白石さや訳 書籍工房早山。
- ⑰ ポール・ウィリス [1996] 『ハマータウンの野郎ども』熊沢誠・山田潤訳 ちくま学芸文庫。

- ⑱ 松田素二 [1996] 『都市を飼い慣らす—アフリカの都市人類学』 河出書房新社。
- ⑲ 宮本常一 [1984] 『忘れられた日本人』 岩波文庫。
- ⑳ 鷺田清一 [2001] 『＜弱さ＞のちから—ホスピタブルな光景』 講談社。